

安全・安心まちづくり

『江戸の大地震対策』 その一

講師 一龍齋貞花

東日本大震災からすでに三年半以上を経過したが、復興未だし。江戸の大地震とその対策を振り返ってみよう。

安房・小田原。江戸城・大名、旗本の屋敷、神社仏閣、町家の多くが倒壊。余震もひどく、津波も起り、家屋の全半壊二〇、一六二戸、死者五、二三人と記録されています。

幕府はすぐに復興事業を指示。一、家が倒壊、焼失した者には特別休暇を与える。二、借金を年賦で返済している場合、今年度分は延納を認める。今年度分すでに返済した者には、その分を返すから自分の家の復興に役立てよ。

六、社会不安を与えるような、デマを流した者は厳罰に処する。七、義捐金ぎえんを大いに歓迎、抛出者は顕賞する。八、罹災者りさいには仮設小屋を用意する。九、死者の埋葬は特例を出す。

江戸開府以来、一六〇三年から二〇一四年までの四一一年間に、単純計算で震度5以上の地震が五〇年に一度、但し近年は頻発している。

地震当日、天文方、気象庁長官渋谷春海が、「今夜、大きな雷か、大地震があります。お騒ぎにならぬように」と予告。

三、地震後の需要から、諸物の値上げを許さない。とくに材木、職人の賃金、大八車の運賃値上げは固く禁止する。四、復興工事は簡素に行うこと。江戸城は応急工事を施し、本格的工事は時機を見て行う。

十、江戸市民の飲料水源の、玉川上水の樋など破損の修理を急ぎ行うこと。十一、罹災者には、救米を行う。十二、家の破損・焼失の復興資金を貸し与える。

のが、元禄一六年（一七〇三）十一月二十二日。安政元年（一八五四）十一月四日・五日。安政二年（一八五五）十月二日。これが江戸三大地震。他に宝永の大地震もあります。

どうやって察知したのか、予告の根拠は分かっている。まさかなまがずが暴れたのを見たのではなからう。武士の最高の学問は、天文・数学。軍師にとって天文は不可欠。戦のない江戸時代、ことに火事が多かっただけに天文方を置いて安全対策をとっていた。

五、被災者への見舞いは、必要、実質的な物を送り、ぜいたく品を送ってはならない。

これらのことが迅速に行われたわけです。危機対策条例、復興対策条例にとらわれて「条例にない、それは出来ない」というお役所仕事がよくいわれるが、第一に市民のために

「元禄の大地震」 元禄の地震の被害は、江戸を含む武蔵・相模・上総・

幕府はすぐに復興事業を指示。

一、家が倒壊、焼失した者には特別休暇を与える。

二、借金を年賦で返済している場合、今年度分は延納を認める。

なにをしたらよいか。専門的知識のない名だけの担当大臣が、「オレは詳しいんだ」と、しゃしゃり出て来て勝手なことを命令したり、業務の邪魔をしたり、本職に任せればいいものを口出して、結果的に遅れるだけじゃなく、間違いを引き起した例がいくつもありました。思い出される方もいらつしやると思います。これは国だけでなく、企業内も同じです。官民一体協力。社内も全員一致協力して対応し、まずナニをしなければいけないかです。

「迅速な行動で復職した加藤清正」

元禄地震の一〇七年前(二五九六)、慶長の大地震(正しくは改元前の文禄五年七月十二日)、近畿地方を襲った地震。この時、加藤清正「殿下(秀吉)のお身の上が心配。すぐに伏見のお城へ駆けつける。火元に気をつけ、表へ出でなば瓦に打たれぬように用心致せ、続けーっ」と韋駄天走り。駆けつけみれば堅固な新築の城も、扉は崩れ門は傾き、大切な大手門を守る者としてなし。この時清正は

朝鮮の戦に出陣中、勝手な振る舞いをしたと、石田三成、小西行長らとあつれきを生じ、禁懐中であつたが主君の安否を心配して一番に駆けつけ禁懐を許されるといふ、講談・芝居でおなじみ「地震加藤」、忠臣清正といわれる由縁の一つ。

伏見城の天守閣、石垣、方広寺の大仏が崩れ、余震は一月続き、伏見城内の死者だけで六百人といひますから、全体でどれくらい死者が出たのでしょうか。

それにしても、大地震に、ソレツと、会社や社長の家へ駆けつけられますか。道路が寸断されていたら無理。役所で毛布や食料を備蓄しているも、職員が役所から遠い所に居住していたら救助、救援は遅れてしまう。清正のようなわけにはいきませぬね。

「貞観津波の記録」

平安時代の貞観地震による津波(八六九)の惨状「原野も道路も総て海となり、船に乗るいとまあらず、山に登るも及び難くして、溺れ死ぬ

者千ばかり」(日本三代実録) この津波で運ばれた砂が、現在の宮城県石巻市から、福島県浪江町まで内港に深く入り込んでいたという地質調査がある由。東日本大震災の津波と同じです。

この貞観津波で多くの家を流された村では、「こより下に家を建てるべからず」という碑を立て、村人はこれを守りそれで降幾度の津波にも家を流されたことがないという。歴史をふまえた教しえの大切さと申せましょう。のど元過ぎれば忘れてしまえますが、防災対策、すみやかな被害処理、対応がいかに大切であるか、歴史を大切にしたいものです。元

禄地震からわずか四年後、宝永の大地震は次



回にお伝えします。